

血尿（無症候性血尿）に対する運動負荷の影響と予期予後に関する研究

第1報：患者分析と血尿パターンの検討

小林昭夫

要約：無症候性血尿の長期予後は不明で、適切な運動指導・生活管理も確立されていない。このため、本症に対する運動負荷の影響ならびに長期予後を検討することにし、まず患者分析と血尿のタイプを検討した。対象患者は371例（男児180，女児191）で、家族内発症（両親または同胞）は25.1%であった。血尿発見時年齢のピークは6～8歳であった。血尿発見のきっかけは集団検尿が45.0%で最も多く、肉眼的血尿22.4%の順であった。血尿のタイプはⅡ型が48.2%で最も多く、ついでⅢ型（21.0%）であった。

見出し語：無症候性血尿、血尿のタイプ、血尿発見時年齢、血尿発見のきっかけ、家族性血尿の頻度

はじめに

学校検尿を中心とする集団検尿により、多くの腎疾患患者が発見されている。その大多数は血尿で、しかもほとんどが蛋白尿を伴っていない。このような血尿のみの症例は無症候性血尿と呼ばれているが、その長期予後はいまだ不明のため患者に対する運動指導・生活管理は医師によりまちまちである。我々はこれらの患者に、①運動負荷を加えた場合の尿所見の変化、ならびに、②長期予後（5年以上の観察）の検討を行い適切な運動指導・生活管理法を求めることとした。今回は患者分析と血尿パターンの検討を行った。

対 象

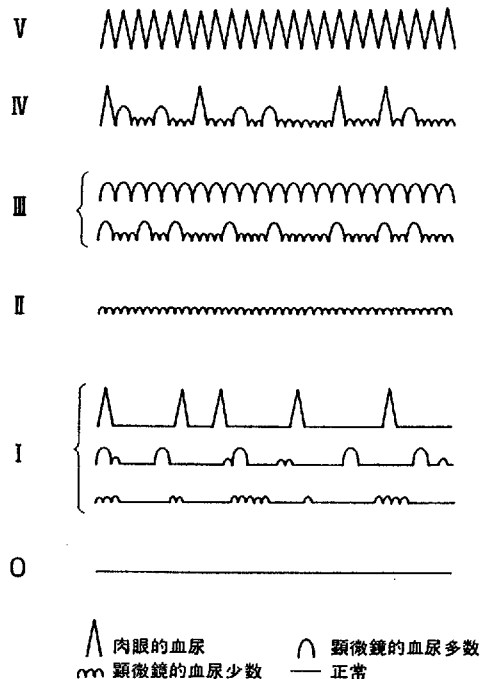
血尿を持続ないし反復し、持続性蛋白尿を伴わず、かつ急性糸球体腎炎、紫斑病性腎炎、持続性低補血およびAlport症候群を除外した371例（男児180例，女児191例）である。性差はみられなかった。今回はこれら371例の患者分析と血尿パターンを検討した。

血尿が発見された児の両親ならびに同胞について検尿を行い家族内の血尿発生頻度を検討した。

血尿を長期間観察することにより、患児の血尿のパターンをⅠ～Ⅴに分類した（図1）。タイプⅠは血尿を反復し、間欠期に血尿がみられない型

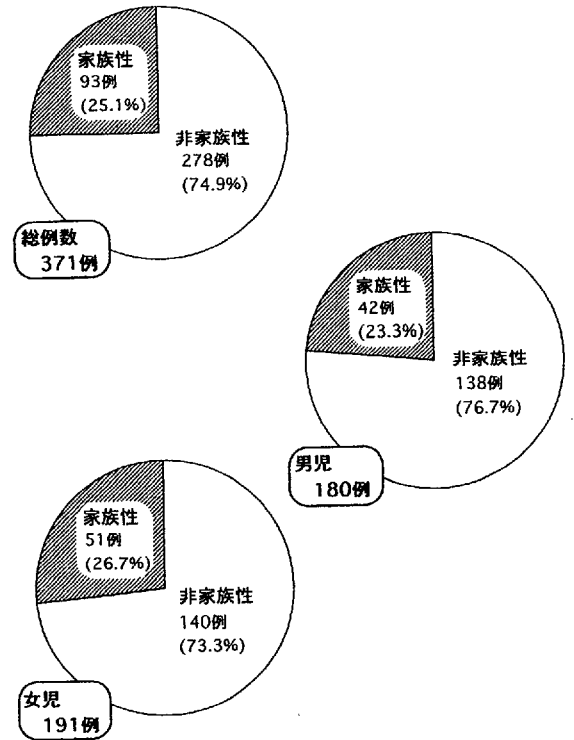
図 1

血尿のタイプ



である。血尿の程度によりいくつかの亜型があるタイプⅡは顕微鏡的血尿少数が持続する型、タイプⅢは顕微鏡的血尿多数が持続ないし間欠的に現われ、それ以外の場合には顕微鏡的血尿少数が持続する型である。タイプⅣは肉眼的血尿を反復し間欠的に顕微鏡的血尿が持続する型である。タイプⅤは肉眼的血尿が持続する型である。

図2
家族性血尿の頻度



成績

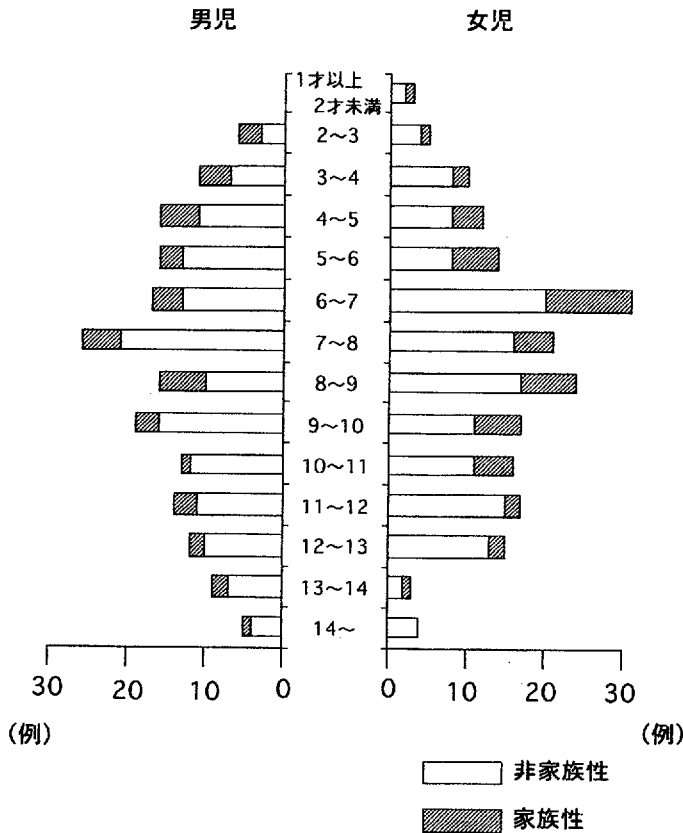
1. 家族内発症の頻度 (図2)

約1/4の症例で両親ないし同胞に血尿が認められた。男児23.3%に対し、女児26.7%で、やや女児に多かった。

2. 血尿発見時年齢 (図3)

血尿発見時年齢は1~15歳と広範囲に分布し、ピークは6~8歳であった。男女間に大きな差はみられなかった。

図3
血尿発見時年齢分布



3. 血尿発見時のきっかけ (図4)

学校検尿などの集団検尿が167例 (45.0%) で最も多く、ついで肉眼的血尿に本人ないし家族が気付いた83例 (22.4%)、発熱などの他症状で受診し検尿を受け、発見された79例 (21.3%) であった。その他、健康診断、術前検査、家族の尿検査などの発見もみられていた。

4. 血尿発見時の血尿のタイプ (図5)

血尿発見時から約6カ月間の観察による血尿のタイプ分けを行った。男女ともII型が最も多く (48.2%)、ついでIII型 (21.0%)、I型 (14.3%)、IV型 (13.2%)、V型 (3.2%) の順であった。

図4
血尿発見のきっかけ

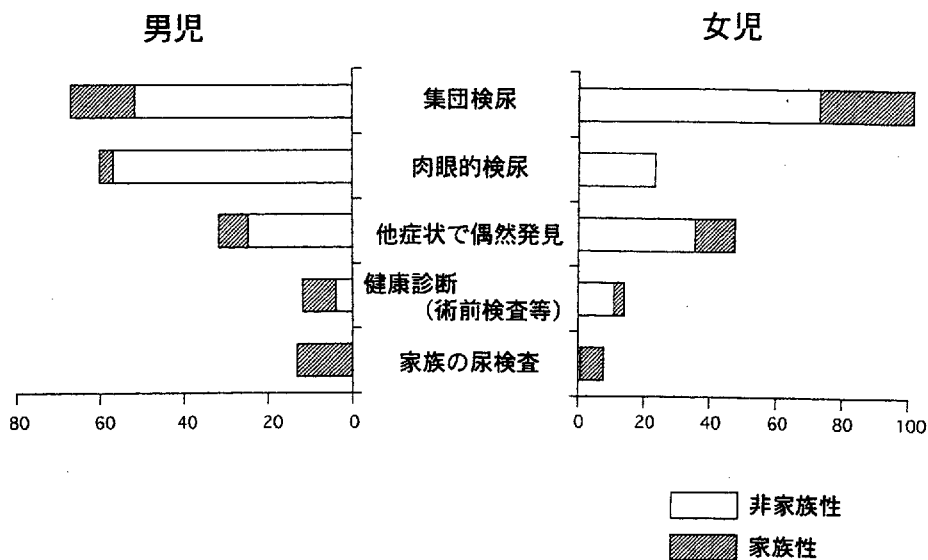
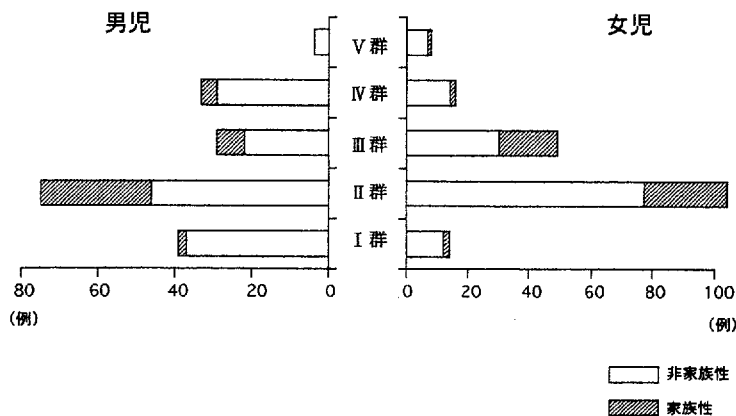


図5
血尿発見時タイプ





検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:無症候性血尿の長期予後は不明で、適切な運動指導・生活管理も確立されていない。このため、本症に対する運動負荷の影響ならびに長期予後を検討することにし、まず患者分析と血尿のタイプを検討した。対象患者は371例(男児180,女児191)で、家族内発症(両親または同胞)は25.1%であった。血尿発見時年齢のピークは6~8歳であった。血尿発見のきっかけは集団検尿が45.0%で最も多く、肉眼的血尿22.4%の順であった。血尿のタイプはⅠ型が48.2%で最も多く、Ⅱ型(21.0%)であった。